



なるほどなっとくニュース

なっとくんの「なるほどなっとくニュース」は、県立山口博物館ホームページでダウンロードすることができます。

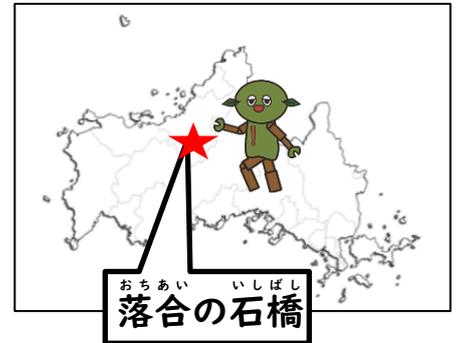
CM

Community Museum
地域の宝 学校の宝

やまぐち いしばし 山口の石橋にせまる

江戸時代に、萩から防府までをつないだ道である「萩往還」。この道のほぼ中間地点に「落合の石橋」があります。国の登録文化財に指定されているこの橋は、私たちが見なれたものとは異なる形をしています。

今回はこの落合の石橋をはじめとする山口県に残る石橋についてなっとくしていただくと思います。



おちあい いしばし
落合の石橋

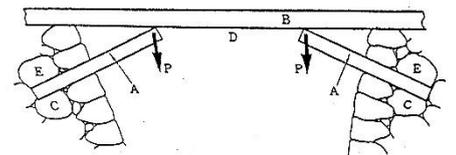
落合の石橋は両岸に石材を入れて、その上に橋げたとなる玄武岩らしき三枚の石を乗せてできています。簡単な構造のようですが、通行人の重さに耐えるほど安定しています。構造年代から江戸時代後期の建設とされています。この橋は江戸時代の記録に「土橋」、「落合土橋」と記されており、昔とは橋の形が変わっていることがわかります。



おちあい いしばし
落合の石橋

このような材質や形の橋を「石刎橋」といいますが、こうした橋は山口県内で他にも見つかっています。萩にある平安橋、藍場川にかかる石橋。長門の大寧寺にある盤石橋、柳井にある天津橋、防府にある枅築欄干橋(写真)などで、実は、山口県以外ではあまり見つかっていません。そのため、石刎橋は山口特有の橋の作りとされています。

確認できるこれらの橋の構造年代を調べると、もっとも古いものは長門の盤石橋で、北部から南部へと橋づくりの技術が伝わった可能性があります。よって、落合の石橋は橋づくりの技術の中継地としての役割も担っていたのかもしれない。また、材料も北の山陰側は玄武岩、南の瀬戸内側は花崗岩で、石材はその土地でとれるものを使用していると考えられます。



いしはねばし
石刎橋のつくり

山本宏『橋の歴史—紀元1300年ごろまで』
1991 森北出版



ますつきらんかんばし
枅築欄干橋